

[発行日]=2000年3月28日

[本文]

ラップランドへ行くと聞いて、だれもが「とにかく服をたくさん持って行った方がいい」と助言してくれた。

内ポケットにスピリッツ (強い酒) の瓶を入れておいて、チビチビ飲んだら体が温まると言う人もいれば、否、それは温かいと錯覚するだけのことで危険だという反論もあった。十分歩いたら必ずカフェなどに入って体を温めないと、凍傷になるという助言もあった。何杯の珈琲 (コーヒー) を飲むことになるだろう。

シルバー (銀細工) コースのステファンはラップランドに行ったことがある。彼の話だと、カメラは懐に入れておき、素早く撮って再び懐にしまうこと。それに、歩いている時も絶えず顔や鼻などを手でこすり続けることがポイントだと言う。

零下二〇度、三〇度というのが普通で、たまに四〇度、五〇度ということもあると聞くと、それは想像できない寒さだろうと思ってしまう。しかし、ヘリデンの「自然」の先生で、ラップランドから来たサーメ人であるロルフに聞くと、南のように風が吹く日が多くないし、湿度も違うので、北の零下一五度は南の零下五度くらいの感じだろうと言う。

写真の先生のベルティは、いくつかの注意すべきことを教えてくれた。寒い所ではカメラのバッテリーが急速に無くなってゆくので、替わりのバッテリーを用意しておくこと。フィルムを巻く時はゆっくり巻かないと、フィルムが切れてしまうこと。部屋の内と外との温度差で、レンズが曇ってしまうので、カメラをナイロン袋のような物に入れておくこと。雪の白さに惑わされず、夕方と同じ暗さだと思って撮ること。出来るだけ被写体に近づいて撮ること、などである。

ヘリデンの先生たちの中で、授業はどうするんだなどと、やぼなことを言う人は一人もいない。自分なりの興味を持って、自覚的に行動する者に対しては寛大だし、むしろ積極的に協力もしてくれる。同じころ、モロッコを目指して四十日間の旅をしている学生もいた。

北極圏へ向かう夜行列車は、信じられないほど、たくさんの車両が連結された汽車だった。寝台車が延々と続いている。ストックホルムを夕方五時に出て、ヨックモックに翌朝に着く。私は普通の座席を予約していた。寝台なんておこがましい。学生なのだし、気分は二十代のつもりだった。友人から借りた寝袋もある。寝る所がなければ、通路に新聞を敷いて寝るつもりでいた。

友人諸兄の助言に従い、後ろへ倒れそうになるほどの大きな荷物を担いでいた。

しかし、どこまで歩いても先頭車両が見えない。こんなに長い汽車は、中国でもイン

ドでも見たことがない。一日に二本しかないというのは、こういうことだったのかと、  
唾然（あぜん）としてへたり込みそうになった。

なんだか予測できない旅になりそうな予感が、背後から近づくのを感じていた。